

# 2023-2025 年度

河合塾講師 テーマ別研究会 研究成果報告書

初等教育研究会 熊崎智子

## 1. [研究テーマ]

いつの時代にあっても、学びには何らかのきっかけが必要である。  
子どもたち(小学生～中学生)が、自ら学びを求めるモチベーションづくりの具体例方法を考える。

## 2. [研究に至る課題意識]

周りの大人が言葉掛けをしながら、知識提供の環境を与えていくことでモチベーションにつながり、子ども自身の中に思考の回路ができていく。さらにそれは、自らの五感を通した身体的経験が伴うことでより強固なものになる。

ひと昔前は、調べたいことがあれば学校の図書室に向かい先生に尋ねたりしながら、ノートに書き込み記録していた。しかし今では、パソコンやスマートフォンをクリックすればあっという間に大量の情報が得られる時代になった。

近頃は中学校理科の教科書にも、ICTを試してみよう！とQRコードがついている。座学で動物や植物の様子、天体観測までできる。楽しみながら興味を持たせることができ便利ではあるが、それは身体的体験としての「調べる」とは異なる。

最近、子どもたちと接していると、即答も上手く、その場に合う都合の良い言葉も良く知っている。しかし、自身の考えや意見を理由を添えながら述べるできない場面によく出会う。それは、身体的体験を削がれていることによるのではないかと感じている。

5年先・10年先の見通しがつけられない状況の世の中にあって、子どもたちが自身の人生にレールを引く力を育てるには、今、何をすべきなのか。

## 3. [研究の進め方]

いろいろな視点からアプローチの方法はあるが、2023～2025年にかけては主に次の4つの方法を並行させ、実施していた。

### 《1》 外部講師による公開講演会

これは、研究会を立ち上げた当初から毎年の恒例行事として、河合塾の大教室やデルファイホールで開催してきた。(ただし、コロナ禍の時期は休止していた。)

講師は、企業の第一線で働くプロフェッショナル、または大学の研究者。

参加者は、河合塾の塾生とその家族、または友人とその家族。

できる限り「ご家族で」と呼びかけるのは、講演後、家族内で共通の話題が増えるからだ。

## ※写真 1 2023年4月29日開催(千種校デルファイホールにて)



NPO 法人日本スペースガード協会による「小惑星から地球を守れ」講演の様子

### 《2》新聞記事を読ませる

河合塾中部では、小学5・6年対象に難関公立高校受験準備ジュニアコースがある。(単に「ジュニア」と呼んでいる。県内のトップ公立高校を狙える能力を身につけるためであり、中学受験コースではない。)

ジュニア発足当初は、アクティブラーニングという言葉が流行っており、そこに照準を当てた授業が求められた。

しかしながら、算数・国語は毎週授業がなされるのに対して、理科・社会科は隔週で実施と決められた。

私はその頃、大学の教育課程でキャリア教育や理科教育を履修していたので(今で言うところのリスキングにあたると思う。)真の意味でそれを取り入れようとするなら、隔週での講数は足りず、内容も根本から組み立て直す必要があると思ったが受け入れられなかった。

そこで、開講まで時間のない中、理科・社会科で取り入れたのは「新聞を読ませ、内容と感想を書かせる」アクティブラーニングプリントというシステムだ。

決して長文の記事は読ませない。長くても500字程度。

#### -方法-

授業後に、枠だけ仕切られた白紙のプリントを渡す。

↓

理科の場合は、新聞を眺めて気になる「理科学的な記事」を見つけたら読む。小学生が知らない漢字や単語があれば、保護者(お兄さん・お姉さんでもよい)に助けてもらう。

↓

次の手順で、プリントに記述。

- ① 新聞紙名、発刊年月日、(朝刊か夕刊かも)記入。
- ② 何が書いてあったかを、読んでいない人が興味を持つように短くまとめる。要約ではなく、お知らせ程度で良い。このように書かねばならないという決まりもない。
- ③ その記事に対する自身の感想を書く。ただし、ただ単に「面白かった」や「ためになった」だけではなく、「何がどう面白かったのか」「なぜ役に立つと思ったのか」 そう思った理由も必ず書かせるようにする。もちろん意見や提案があれば書いて良い。

テストのような正解・不正解はない。

↓

提出後、講師がチェックしてコメントを書き入れて返却。

-目的-

他者の話す客観性(記事の内容)と自身の感じた事(主観性)を区別できる、整理された思考を持てるようにしたい。

また、なぜ新聞記事かと言えば「正しい日本語」「太字の見出しは究極の文章要約」「時事が分かる」の3点でとても良い教材になるからである。

### 《3》理科・社会科合同イベント

教科の性質として、国語や算数は下の学年からの積み上げが大切である。例えば、四則計算ができないと、分数も因数分解も解けない。途中で躓くとお手上げになる。

しかし理科と社会は、いくつかの分野に分かれている。

理科=生物・化学・物理・地学

社会科=歴史・政治・地理

それぞれを異なる科目のように、並行して進めることができる。実際、河合塾の中学社会は、今週は歴史、次週は地理...と交互に講義を進めている。

ある分野が苦手でも、別の分野が好きなら高得点を取れるため、科目としての理科や社会科を嫌う生徒は少ない。

また、理科の「地学」と社会科の「地理」では、共通したテーマも多い。

例えば、どちらの教科にも「V字谷・扇状地・三日月湖・三角州などの地形」が取り上げられている。

ただし、理科ではそのでき方を「流れる水の物理的な作用」から理解していくのに対し、社会科では「河川が作る日本の地形と生活や文化」を...と、視点を変えてそのテーマを学ぶ。

理科と社会科の知識を合わせれば、日本の地形に対して幅広い視野を持って語るができるようになる。

その観点から、こどもたちの思考の幅を広げる目的で、「なるほど納得、理科・社会」というタイトルで、ジュニアイベントを行った。

社会科の講義は、当研究会の副代表である志村裕之講師が担当した。

志村講師も、理科と社会科の視点を持ち寄ることでこどもたちの「教養が育つ」という考えを持たれていた。

-イベントの講義内容 例-

当時、10,000mの深海底からマイクロプラスチックが発見されたという話題があったため、「マイクロプラスチックによる海洋汚染」をテーマに設定し、親子参加のイベントとした。

イベントの初めに「理科と社会科はつながる科目」である事を解説。

↓

クイズで親子対決。

親子で協力して解くのではなく、親子で知識を競わせる。（大人とこどもの「個」を尊重するため。）

クイズは、マイクロプラスチックとは？ウミガメの好物は？深海は、水深何メートルから？など...4～5択の選択肢で答えを選ばせる。

↓

理科として

個々の知識を解説しながら、クイズの答え合わせ。

↓

社会科として

海洋汚染をSDGsの観点から解説。

また、社会見学等、身近な場所に足を運んで調査するスキルを伝授。

## 《4》お話し会

2024年の2学期から、ジュニアの授業の後（16:30～18:00のサテライトタイム）小5・6の参加希望親子を募り開始した。

講義内容は学校や塾の勉強ではない。

講師や大学生のチューターの「単なる趣味」を聴いてもらう。目的はなく、ただ「その内容を聴きたい」親子が参加する。学校のお友達や小さい兄弟姉妹も参加可とした。

ただし単なる趣味といっても、一定の生物の一生を実際に撮影した画像とともに綿密に追った観察記録で研究発表としてのスタイルをとっている。

将来的にプレゼンテーションをする機会もあるだろうから、その参考になればという意図もある。

例1 アシナガバチの一生（講師:熊崎）

例2 アゲハの一生（講師:大学生チューター神戸絢裕）

### ※写真2 神戸チューターによるお話し会の様子



#### 4. [具体的な成果]

##### 《1》外部講師による公開講演会

講演者に前もって当研究会の趣旨をお伝えしておく、どの講演者も子どもたちの視座に合わせて話をされる。これからの人生のために、今何をすべきかを人生の先輩から学ぶため、講演内容に興味をもった子どもたちが、質問タイムに長蛇の列をつくることもあった。

そのときの子どもたちが大学生になって「あの講演がきっかけで理学部に入りました。」とか「〇〇の研究がしくて〇〇大学に入りました。」とか...数年後に河合塾へ訪れてくれる事が多くなり、中にはその講師と同じ出身大学の学部から、同じ大学院に進んだ生徒もいる。その道のプロフェッショナルが、講師として子どもに寄り添った姿勢で話をされることは、大きな効果をもたらすと実感するようになった。つけ加えるならば、興味があればネット検索で得られる内容であっても、目的の場所へ足を運び生の声を聴く...その「体験」そのものが必要なのだろう。

##### ※写真3 2024年12月14日



毎年恒例のふたご座流星群観測イベント。公開講演会リピーターだった生徒たちが大学生となった今も、当時のように親子で参加。

##### 《2》新聞記事を読ませる

初めの頃は、記事の選択に困るだろうと、教材を与えてその中から選ばせていた。例えば最近のものであれば...

- ・気温 40°C以上は「酷暑日」 気象庁が新名称を決めた。
- ・ウシも道具を使える～長い柄のブラシをくわえて体を搔く～ウィーンの研究チームが発表といったもの。

河合塾生は小学生であっても、自身の能力を超えた高いレベルのものを選んでしまいがちだからである。特に保護者が。そのため、あえてラフな記事を見せておく。

そのうち、慣れてくると自身で記事を選んでくるようになり、思い思いの感想が書けるようになってくる。

感じた気持ちを、言葉や文章に組み立て直す脳内の作業は自身の世界観が広がっていく。

言葉を出したり文章化したりするには、その出し方や使い方の経験を繰り返して上達していく事が分かる。

初めは、新聞記事を丸写しで提出していた生徒も、後半にはこれ自体がレポートになると思えるようなプリントを提出してくれる。

過去の生徒には連絡が取れないため、掲載の許可を得た今年度の生徒のもの。小5で初めてのプリントながら、良くまとめられている。(赤字は講師のコメント。)

### ※アクティブラーニングプリント

2026年4月11日

小5 理科 第1講 天気の変化

2026年4月2日 読売 KODOMO 新聞

キントウ鳥が  
いたのだから。  
神め2  
知りませ〜Q

45年ぶりの新種の鳥石確認  
～トカラムシクイについて～



上・トカラムシクイ

日本国内で、45年ぶりに新種の鳥が石確認されました。鹿児島県十島村のトカラ列島に生息している全長12cmのムシクイ科の鳥です。これまで、この鳥は「マイヅルムシクイ」と同じ木霊だと考えられていましたが、調べると、トカラムシクイの方が小さく、鳴き声もちがうことが分かりました。さらにDNAを分けた結果、280万年～320万年前に分かれた別の種だと判明しました。日本で新種の鳥が石確認されるのは、沖縄県北部に生息する「ヤンバルクイナ」が1918年に発見されて以来で、45年ぶりの新種です。

感想 ～上のことについての～

Good

私が上のことについておどろいたことは、2つあります。1つ目は、新種発見が45年ぶりだということにおどろきました。2つ目は、発見がヤンバルクイナ以来だということです。なぜなら、ヤンバルクイナは、もう、学校では、5人に1人は、知っているくらいだからです。(シンギアにもいる!)

将来、トカラムシクイのヒトも5人に1人くらいは、ヒトもトカラムシクイを知ることにはなりたい。

所属校番	学籍番号	教室名	氏名
千種校			

文字の正しい書き方 河合塾  
コメントの配置などレイアウトが  
とても読みやすいです。

©Kawaijuku Print'd in Japan  
無断転載複製禁止・譲渡禁止

=2/=  
ま

平成31年(2018年)2月14日朝刊

# 花粉症 = 免疫力が強い

花粉症が起きるしくみ  
花粉が体に入ると……

人間の体には入ってきたものを「友達」と判断した時に追い出して体を守ろうと免疫の働きがあります。  
風邪のウイルスが体内に入ったときも、この免疫が働いてウイルスをやっつけようとします。  
花粉症はこの免疫が働きすぎておこる病気です。

感想  
私も自分が花粉症でどうしてはな水やくしゃみがするのかわかりませんでしたがこの記事を読んでもなぜくしゃみが出てくるのかわかりました。なので家族にも教えます。

私を教えたおかげでよくわかった。ありがとう！  
勉強になりました。

所属校舎	学籍番号	教室名	氏名
千種校			

河合塾

こどもたちの多くが「これ面白いから皆んなに知らせよう。でも、何て言ったらいいのかなあ？」という、言語化される前のモヤモヤとした気持ちに悩むが、やがてはこれを時間をかけずに文章化できるようになっていく。

このプリントを毎回続けてきた生徒は、2学期以降、授業内での発言内容も明らかに変わってくる。感じたことを言葉に出したり文章化したりするには、その出し方や使い方の経験を繰り返す事で上達につながると分かる。これも、デジタル機器の教材だけでは学べないことだ。

また、発刊年月日を入れた新聞社名を書き入れる事で、自身が「責任ある情報提供」をしているのだと分かせたい。  
やがて大学生になったとき、レポート作成時に必ず「参考文献」を入れるが、そのときにこの意味が分かってもらえると良い。

### 《3》理科・国語科合同イベント

イベント後、参加親子のアンケート結果から、さまざまな世界観が展開される事に大変な好評を得た。  
ひとつの事象に対して、視点を変えると見方が変わる。逆に異なる視点から知識を合わせて積み上げると、鳥瞰図的な理解ができる...まとめると、このような感想である。

理科・社会科で成功したので、その後「理科と国語」で同様のチャレンジを試みた。  
理科と国語科一緒にイベントを組む事は今まで考えたこともなかったが、開発的な授業ができるのではないかと、国語科の朝倉環講師が応じてくださったため、古典の「竹取物語」をテーマにして行った。

#### ・理科として

タケの成長のはやさ(かぐや姫は成長が早かったことにこじつける)、タケの空洞の中に稀に樹液のようなものが溜まることがあり輝いて見える(玉のようなかぐや姫にこじつける)、月の満ち欠け周期、蜃気楼の原理(月からのお迎えにこじつける)

#### ・国語として

古文の読み方と文体の流れ、かぐや姫の成長とともに変化する心情、求愛に来た男性の心情、竹取の翁の心情等。

この企画も、参加親子に共感を持たれた。ここでも他教科どうし共有できるものがあり、ここから学びへの興味を持たせることで総合学習への入り口につながると感じた。

### 《4》 お話し会

特に目的のある講座ではなかったが、具体的に成功する結果が得られた。  
参加していた小6(当時)女子が、啓林館の主催する科学研究のコンテストに応募して「特別賞」を受賞した。  
本人はもともと伊能忠敬の日本地図にとっても興味を持っていて「自分でも再現してみたい」と、実行して発表したそうだ。  
「お話し会で好きなことに夢中で取り組むことを教えてもらったから、自分でも好きなことを極めようと思った。」と報告を受けた。  
そこまで意図せずの企画だったが、これだけのことでも生徒の心に種子を蒔くことができると実感できた。

## 5. [今後に向けて]

新しいキャリア理論として「ハプンスタンスアプローチ」(クランボルツ 1999)がある。  
PlannedHappenstance(計画された偶然)理論では、人生は「たまたま」や「偶然の出来事・出会い」によって決まることが多いとされる。

今までのキャリア教育は、勝ち組になるとか人生計画を立て成功を目指すとかいったものであった。しかし、今は計画を立てても先の読めない世の中でもある。勝負ではないキャリアもあって良いのではないかと。

そのためにも、大人たちは子どもたちに対して「偶然の種子を蒔く」ことが大切である。また、それを受け止める子どもたちには「好奇心や粘り強さや柔軟性」があることも理想ではある。これがあって初めて、「偶然」が「必然」に変わる。

初等教育研究会は子どもたちの環境には介入できないが、いろいろな視点・いろいろな場面から、いつでも種子を蒔くことができる。これが種子になるかもしれない...といったチャンスを逃さないよう常にアンテナを張っておきたいし、そのためにも私たち自身が常に好奇心を持って学ぶ姿勢を忘れてはならない。

河合塾のテーマ研究会は活動の区切りとなったが、初等教育研究会としてはこれまで得た経験と実績を活かして、研究会メンバーとともに今後も活動を続けていきたい。